

禪門『十二時』（敦煌文献ペリオ三六〇四）について

呂 斯 微

敦煌文献として禪宗と密接な関係のあるものに、三・五・五・五と、三七・七・七の型体によって作られた『禪門十二時』がある。

この題材と関係する先行研究には、入矢義高氏、鈴木哲雄氏、上山大峻氏による論文がある。これらの先学達は、『十二時』は、民間に残っているメロディーを採り、そのメロ

ディーを合わせて作った詩に、禪の境地を示したり、教導したりする際に用いられるものであり、この写本は禪に關係するテキストであるとの見解を提起する。本論では、ペリオ三六〇四（台湾大学図書館所蔵マイコフィルム Peilo 3604）を中心にして、『十二時』の禅思想と文学的表現を先学の研究に基づき、このテキストの持つ問題を取り上げ、検討を加えて見たい。

『十二時』とは一日を十二の時に分つたもので、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の時刻であり、午後十二時、及びその前後二時間から、夜半・雞鳴・平旦・日

出・食時・禺中・日中・日昃・晡時・日入・黄昏・人定をいう。また、楽曲の名を指す。唐の段安節はすでに、『樂府雜錄』において、『十二案樂』のなかに『十二時』があることを述べ、『唐會要』卷三十三、諸樂の条、林鍾角調にも関連する記述があつて、さらに『隋書』禮樂志の『十二時』と關係していることを記している。

『禪門十二時』も、『十二時』の楽曲の二種である。十二首の各々が韻文によって構成されるもので、『五更轉』などと同じく句格の篇章を成すところの「定格聯章」の一種である。標題にある「禪門」とは、禪家とか禪宗の法門の意で、坐禅の実践によって悟りを得ることを説くものであり、行住坐臥において思量すべきことをいうのである。この修行の勧めを十二支に配して説いたものを、讚・曲という形態によって、修行する境涯を中心に、禅の思想を説くものが、『禪門十二時』である。特徴は、同形の詩格を連ねて一篇と成した詩形をなし、禅家語録等に収られる禅の要旨を示したテキストと

禪門『十二時』（敦煌文獻ペリオ三六〇四）について（呂）

は、その様式を全く異にする。

『十二時』のテキストを考察するに、三・五・五・五の形体を範圍にし、任二北氏の『敦煌曲校録』と金岡照光編『敦煌出土文学文獻分類目錄附解題』中の定格聯章類「禪門十二時」を参照すると、ペリオ二六九〇・ペリオ三一六・ペリオ三六〇四・ペリオ三八二二が挙げられる。更に、筆者は今回、新出文獻として、俄藏Ⅱx〇四三一〇を紹介する。このテキストには、少なからず誤字を見出すことが出来るが、既紹介のテキストとの校訂に際し、有益であると思われる。ペリオ二六九〇本の篇首には、いわゆる『十二時問』の文があり、『出家讚』と『南宗讚』なども連写されている。その題名「十二時」の前には、「六月日弟僧保福狀上」と、「孟秋猶寒伏惟家兄尊體起居萬福」の文を添えられている。文末には、「此是禪門十二時讚」と記されている。この部分は、次の『大乘讚』とともに、全く前後の文と違うように左から右へ写している。ペリオ三八二二本の篇首には『女人百歳篇』、及び『百歳詩十首』が連写されている。そして最後に、『十二時行孝文一本』と題される不揃いな文がある。全篇に誤字は少ないが、三言と五言の偈文形式で、上下の句を一行の中に整列させている。

本論の課題とする文獻は、ペリオ三六〇四の禪門『十二時』である。このテキストは、諸テキストの中で最も完全な写本

といふことができる。本文（以下ペリオ三六〇四を指す）は一六字であり、文末の三十六字の願文を合わせて二五二字である。文末には、「維大宋乾德捌年（九七〇）、歲次庚午正月廿六日、燉煌鄉書手（以下紙の破損のため不明）兼隨身判官李福延、因為寫十二時一卷為願」と願文をつけている。これを見ると、『禪門十二時』が、一般の仏典と同様、発願写經の対象となつてゐることが察せられる。

テキストの大意は、「心が常に居住することができないから、煩惱を生ずれば心が妄となり、一生が無駄になる。これよりも寧ろ涅槃のもとに戻ることは究極真実である」と言う。続けて、もし鏡をもつて自分の心を照らせば、何があるかはつきり分る。迷つて虚しくものを求めれば、生死に流浪するのだ。元々、この身は永遠なものではないことを知り、手のうちに数珠を持つて念念に心から離れず。まだ悟ることができなければ、朝早く床を離れ、正しく坐つて心を觀じ、無明の布団を取り去るのだ。仏性は人々が本来、心の中に持っているものであるから、窓が次第に明るくなつてくると、自然に煩惱の暗は消えていくと見性への道を説く。

本文において注目されるべき禪思想は、「滅睡還須起、端坐正觀心」、「念念不離心、數珠恆在手」に收約されている。この觀心念佛の思想は、心の本性を明らかに觀ずることであり、自己の心が仏であると觀じて念仏することに外ならない。

これは自己の心が淨土であると観ずることでもある。『禪門十二時』の法門は、念仏禪の影響が感じられるが、教義・思想を論じる理論だけではなく、恐らく禪定と念仏をあわせ行つたもので、自己の心を觀察し修行すると言う実践を必要としたのであろう。

『禪門十二時』の観心念仏の思想は、『楞伽師資記』、道信伝に、

善男子善女人、欲入一行三昧、應處空閑、捨諸亂意、不取相貌、繫心一佛、專稱名字、隨佛方所、端正正向、能於一佛、念念相續、即是念中能見過去未來現世諸佛（柳田聖山『初期禪宗史書の研究』、禪文化研究所昭和四二年 五七〇頁）

や、『傳法寶記』に見られる、「及忍・如・大通之世、則法門大啓、根機不擇、齊速念佛名、令淨心」（柳田聖山『初期の禪史』筑摩書房昭和四六年 一八六頁）に見えるように、いわゆる東山法門に属した禪師達が実践したといわれる淨心念仏であると言える。つまり『禪門十二時』では、数珠を持つて念仏し、心を観ることによって、心が相續し瞬時に離れない様子が「観心念仏」と位置づけられる。このような修行法は、神秀の禪法に非常に近い関係と言え、『禪門十二時』と言うテキストが、北宗禪の思想を持つものであると推測できるのである。

次に禪門『十二時』を文学的観点より見ると、中には声韻

の法則に沿わない箇所がある。例えば「側目看」は「仄仄仄」、「何時逢」は「平平平」であり、いわゆる「連三仄」と「連三平」という詩の作法に悖るものである。これを見ると禪門『十二時』も文学的な作品というより、むしろ説理的なものとと言えるであろう。ただ各句の句尾の韻声を探して見ると、任二北氏が、十二時は声を上げて歌うことができる曲調だから、読んで吟ずる吟詞というものではないというように、全文の韻脚から見ると、確かにそういうように言いうるであろう。各首に句名を含み、その韻脚もほぼ同じである。例えば首句の韻脚「真・嗔・身」はともに上平真韻（「真」（子音）であり、次に「晡時申」の韻脚「申・因・塵」も共に上平真韻である。十二首の中に上平真韻が三つ、仄声紙韻と仄声有韻は二つずつある。このように歌のようなリズムを持つていて、本文を読んでも自然に声の調子が出て来るのである。

その「火宅難居」や「迴向涅槃」など、經典の影響が残っているものにしても、創作の真意は分らないが、各首につけた句名と句尾の韻脚については、他の禪録にもやはり同じ形が見られる。かなり短い文章であっても、韻脚をつけていて、文もまた容易で、論説を表わそうとする観心念仏の禅思想が明確に現れている。『禪門十二時』の文学的特性は、リズムをもっている簡潔な三・五・五・五の形式で、詠唱しやすい祈願の機能を加えて、広く伝えられたのである。

禪門『十二時』（敦煌文献ペリオ三六〇四）について（呂）

ただ、願文の作られた年代や、識語によって写した動機が推察されるけれども、禪門『十二時』の文を原作は一体誰がしたのか、原本の成立したのは何時かということは、今までもはっきりと知られていないが、連写されたテキストに「十二問」（Brahmāyaśaの宗論の記録）がある事から、八世紀末を成立の下限と考える事が出来る。又、思想的には人間の有限性を挙げ、人間を超えるような奥深い目標に向かって行じる観心や念仏などを主張する文句を見るに、初期禪宗、特に北宗系統の思想と深く関係するものであると思われる。他方、比喩を用いる表現によって詩的リズムも益々効果的である。特に韻脚をつけると、「（二）（子音）」と結びの韻声にどのような効果があるかなどについては、今後の研究課題になると思われる。

以上述べたその外見的楽曲形式と表現した念仏観心思想を見ると、中国の初期禪宗の発展段階で現れた思想の様子を説明するだけではなく、詩詞・韻律の特徴である論説様式を兼ねて備える性質を持っている。

〈注略〉

〈キーワード〉 禪門十二時、観心、数珠、判官李福延

（花園大学大学院）

新刊紹介

武田 浩学

『大智度論の研究』

A5版・四〇九頁・定価一〇、〇〇〇円
春秋社・二〇〇五年一〇月

ture of that work is its emphasis on living freely without attachment to the concept of enlightenment.

30. A “12 Division of Time” in Chan — Dunhuang document Pelliot chinois #3604

Szu-wei LU

This document is based on the division of time named “the twelve horary signs,” and elaborated in the twelve kinds of verses. The unknown author of this document states his thought and practices of Chan through these verses. This was formed under the influence of the Northern Chan School before the eighth century, characterized by Nembutsu (Buddha-Contemplation)-Chan syncretism.

31. The Problem of *An Account of the Coming East of Huineng's Dingxiang*

Young-sik JEONG

In this article, I have examined a Korean text *An Account of the Coming East of Huineng's Dingxiang* written by a Korean monk Kakhun (覺訓). It tells the story that a Silla monk Kim Deabi (金大悲) tried to cut the head off the corpse of Huineng, an episode mentioned in the *Jingde Chuandenglu* (1004). However, this document is based on two materials: the *Sanggaesa jingamsōnsa daegong tappi* 双溪寺真鑑禪師大空塔碑 and the *Samguk yusa* 三国遺事. Two problems are focused on here. First, a ‘Dingxiang’ portrait of a Chan master is equivalent to a ‘head’; second, the creation of the monk Kim Deabi 金大悲 just originated from a sentence that “there is a statue of Taeabi 大悲 in Paengnyul (栢栗) Temple”.

32. The *Kettō Jushuin Gimonsō* (決答授手印疑問抄) of Ryōchu (良忠)

Kōjun HAYASHIDA

This paper is a study about the reason why Ryōchu (良忠) wrote the *Kettō*